

トルコギキョウの摘らいによる切り花品質向上

小林祐一・江川孝二*・菅野清

(福島県農業試験場会津地域研究支場・*福島県南会津農林事務所南郷普及所)

Improvement of Cut Flower Qualities by disbudding in *Eustoma grandiflorum*

Yuichi KOBAYASHI, Koji EGAWA and Kiyoshi KANNO

(Aizu Area Studies Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station ・*Fukushima Prefecture Minamiaizu District Agriculture and Forestry Office, Nango Agricultural Extension Service Station)

1 はじめに

トルコギキョウの花芽分化は、高温や長日で促進される¹⁾。秋に収穫するトルコギキョウの栽培は、春に播種し、夏越しするため高温・長日下での栽培となる。そのため、この作型においては、切り花長が短く、花らい数が少なくなるなど切り花品質の低下を招きやすい。そこで、摘らいによる切り花品質の向上について検討したので報告する。

2 試験方法

試験は、中生種の‘あすかの粧’と晩生種の‘つくしの雪’を供試し、2001年から2002年にかけて福島県農業試験場会津地域研究支場で行った。2001年は、5月1日に播種し、6月15日に定植した。2002年は5月1日及び5月10日に播種し、それぞれ6月20日、7月1日に定植した。定植は本葉2対葉展開時に行った。育苗は、両年ともガラス室でスーパー子床Hを用土として288穴セル成型トレイを用いて、子葉展開期までトレイ底面から給水し、子葉展開期以降は定植までの間上部灌水した。育苗中の温度管理は、25°Cでガラス室を開閉し、15°Cで暖房機が稼働するように設定した。基肥は、a当たり窒素1.0kg、りん酸1.5kg、加里0.8kg、堆肥300kgを施用した。栽植は、床幅100cm、条間12cm、株間12cmの8条植えとした。供試株数は、1区当たり16株で2反復とした。摘らい部

位及び摘らい時期は、2001年は摘らい部位を第1小花のみ、第1小花及び第2小花の2処理とし、摘らい時期は発らい直後とした。2002年は摘らい部位を2001年同様とし、摘らい時期は発らい直後及び発らい1週間後の2処理とした。なお、2001年は摘らいを行わない、無摘らい区を設けた。本圃(パイプハウス)の温度管理は、定植から8月末日までハウス側面、出入り口を昼夜開放し、9月以降は25°Cでハウス側面を開閉し、15°Cで暖房機が稼働するように設定した。収穫は、1株当たり5輪開花した時点で行った。

3 試験結果及び考察

(1) 収穫期

収穫期は、摘らい時期が同じ場合、第2小花まで摘らると遅くなるものの、第1小花までの摘らいとの差は平均日で2から7日と小さかった。また、摘らい部位が同じ場合、摘らい時期が発蕾直後と発蕾1週間後では大きな差がなかった(表1)。したがって、第2小花までの摘らいと摘らい時期が発らい直後から発らい1週間後の範囲では、生産上有益な開花調節は難しいと考えられる。

(2) 切り花品質

第1小花の摘らいは、無摘らいに比べ切り花長に差は認められなかったが、有効花らい数が増加する傾向にあった。第1小花及び第2小花の摘らいは、無摘らいに比べ切り花長が長く、有効花らい数が増加する傾向にあった

表1 トルコギキョウの摘らい部位及び摘らい時期と収穫期の関係(2002)

定植日	品 種	摘らい部位	摘らい時期	収穫期 (月・日)			
				平均日	始期	盛期	後期
6月20日	あすかの粧	第1小花	発らい直後	9.4	8.31	9.4	9.9
		第1小花	発らい1週間後	9.3	8.31	9.3	9.7
		第1小花及び第2小花	発らい直後	9.7	9.4	9.7	9.13
		第1小花及び第2小花	発らい1週間後	9.5	9.2	9.7	9.9
	つくしの雪	第1小花	発らい直後	9.12	9.8	9.12	9.17
		第1小花	発らい1週間後	9.12	9.6	9.11	9.16
7月1日	あすかの粧	第1小花及び第2小花	発らい直後	9.14	9.11	9.15	9.18
		第1小花及び第2小花	発らい1週間後	9.15	9.13	9.17	9.30
		第1小花	発らい直後	9.12	9.8	9.12	9.16
		第1小花	発らい1週間後	9.11	9.7	9.12	9.23
	つくしの雪	第1小花及び第2小花	発らい直後	9.17	9.13	9.17	9.23
		第1小花及び第2小花	発らい1週間後	9.17	9.10	9.17	9.25
		第1小花	発らい直後	9.20	9.15	9.18	9.27
		第1小花	発らい1週間後	9.19	9.12	9.20	9.27
		第1小花及び第2小花	発らい直後	9.27	9.23	9.27	10.3
		第1小花及び第2小花	発らい1週間後	9.25	9.19	9.24	10.2

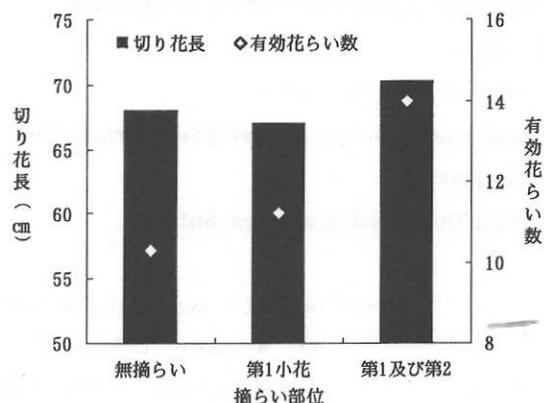


図1 トルコギキョウの摘らい部位と切り花長及び花らい数の関係(2001)
 注、1)摘らい部位第1及び第2は第1小花及び第2小花
 2)品種はあすかの粧
 3)6月15日定植

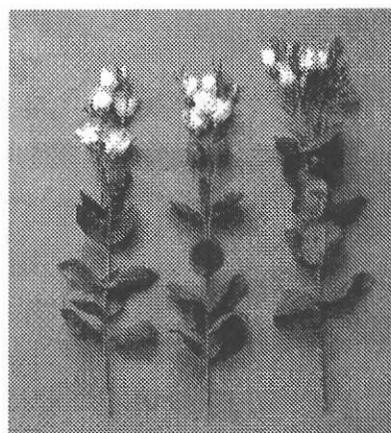


図2 摘らいをしたトルコギキョウの収穫時における草姿(2001)
 注、左から無摘らい、第1小花の摘らい、第1小花及び第2小花の摘らい

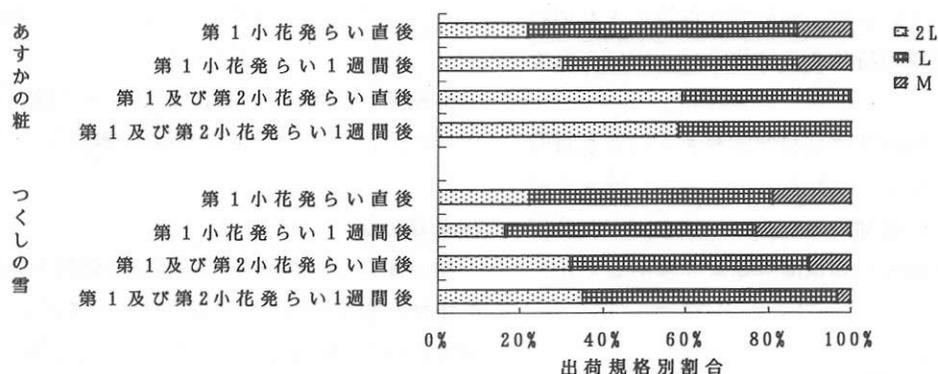


図3 トルコギキョウの摘らい部位及び摘らい時期の違いと出荷規格別割合の関係(2002)
 注、1)出荷規格は平成14年度福島県青果物標準出荷規格により区分、2Lは切り花長80cm・開花数が3~5輪でつぼみ数は開花数と同程度、Lは切り花長70cm・開花数が3~5輪でつぼみ数は開花数と同程度、Mは切り花長60cm・開花数が3~5輪でつぼみ数は開花数と同程度
 2)7月1日定植

(図1)。草姿は、第2小花まで摘らいしても乱れなかった(図2)。したがって、切り花品質の向上には、第2小花まで摘らいするほうがよいと考えられる。

(3)出荷規格別割合

上位規格の割合は、摘らい時期にかかわらず、第2小花まで摘らいすると増加した。摘らい位置が同じ場合、摘らい時期が発らい直後と発らい1週間後とでは出荷規格別割合の差は小さかった(図3)。したがって、上位規格品を多くするには、第2小花まで摘らいすることが大切であると考えられる。

4 まとめ

収穫期は、摘らい部位や摘らい時期の早晚により大きく変わらなかった。草姿は、第2小花まで摘らいしても乱れなかった。切り花品質は、第2小花まで摘らいする

と、切り花長が長くなり、出荷調整後の花らい数も増加した。上位規格の割合は、第2小花まで摘らいすると増加し、摘らい時期の早晚による差はみられなかった。

以上のことから、トルコギキョウの秋出しにおいて、摘らいを第2小花まで行くと、草姿の乱れがなく、切り花品質は向上し、上位規格の割合も増加した。一方、摘らいによる生産上有益な開花調節はできなかった。よって、摘らいは、切り花品質の向上に有効であると考えられる。

引用文献

1) 塚田晃久, 小林隆, 長瀬嘉迪. 1982. トルコギキョウの生理的特性と栽培に関する研究 第2報 生育・開花に及ぼす温度・日長の影響. 長野野菜花き試報, 2:77-88.